

自著紹介、および「トランスギャルド叢書」創刊について

マリー・ダリュセック著、荒原邦博訳
『ここにあることの輝き——パウラ・M・ベッカーの生涯』
東京外国語大学出版会、2023 年

現代フランスを代表する女性作家の 1 人、マリー・ダリュセックが 2016 年に上梓した『ここにあることの輝き——パウラ・M・ベッカーの生涯』は、女性の裸体自画像を歴史上初めて描いたとされる 20 世紀初頭のドイツ人画家パウラ・モーダーゾーン＝ベッカーをめぐる伝記小説である。1996 年に『めす豚ものがたり』で衝撃的なデビューを飾ってから、女性人物を中心に据えたフィクションやエッセイの数々を刊行してきたダリュセックがメディシス賞を受賞した『待つ女』(2013) の後で対象とすることを選んだのが、この女性画家であった。

小説のタイトルはライナー・マリア・リルケの『ドゥイノの悲歌』の詩句から採られている。そのことが示すように、本書はパウラとリルケがブレーメン郊外の芸術家村ヴォルプスヴェーデで出会い、彫刻家で後にリルケの妻となるクララ・ヴェストホフ、パウラと結婚することになる風景画家オットー・モーダーゾーンも交えて恋愛し、創作する様子が描かれている。またパウラの 4 回のパリ滞在、パリとヴォルプスヴェーデの間の往復が、おおよそ編年的に記述される彼女の生涯にリズムを刻む。

とはいえ、この小説は単なる「伝記」ではない。そこにほぼダリュセックを思わせる「私」が頻繁に介入し、パウラの絵を求めてドイツ各地の美術館を訪れ、考察する様子が書かれているという点ではオートフィクションであり、それがパウラによる裸体自画像の持つ自己虚構性と相乗効果を生み出しながら交錯あるいは交響するオートフィクションとなっている。

ダリュセックは、フランス革命期から 20 世紀初頭までの女性画家が置かれた状況、すなわち裸体画をめぐる社会的な制約、そして創作に集中できる十分な収入を得ることや自分専用のアトリエを持つことの困難といった経済的な側面——本書と同じ 2016 年に出版されたダリュセック自身によるヴァージニア・ウルフ『自分ひとりの部屋』のフランス語新訳の内容と密接に関連する主題系だ——にも目配りしながら、パウラの「輝き」を現代に取り戻そうとする。その「輝き」とは、両者とも 1906 年のパリ滞在時に描かれたパウラの《六回目の結婚記念日の自画像》や《横たわる母と子》における女性の裸体であり、彼女の画面の中には同時代のピカソやクリムトの女性とは異なる、「男性のまなざしから」ついに解放されて「裸になった女たち」がいるのだ。

本書は「パウラには本物の女たちがいる」と宣言しながら、同時にまたオートフィクションの虚構性がその「本物」らしさを宙吊りにする。また彼女の日記や手紙、リルケの作品をしばしばドイツ語混じりで引用することによってフランス語の自明性を攪乱し、2 言語

使用による新たな言語の創造を試みており、言語と視覚イメージ双方による横断的体験の中に読者は投げ込まれることになるだろう。

そしてもしもあなたがダリュセック作品をすでに読んだことがあるならば、『ここにあることの輝き』が今なおその魅力が色褪せることのない傑作『めす豚ものがたり』にどこか似ていること、すなわち、2つの小説が揃って主人公の若い女性と2人の男性との関係、その女性をめぐる視覚イメージの効果に対する考察を含んでおり、共にある種のディストピアを生き延びる物語であることにふと気づいてその構造的な同一性に軽いめまいを覚えて陶然とすることになるはずだ。

*

ダリュセックによる『ここにあることの輝き』は、東京外国語大学出版会が提案する新シリーズ、「トランスギャルド叢書」(略称「TG叢書」)の第1巻を構成する。本叢書は現代ヨーロッパとアメリカの文学作品から成るシリーズであり、文学作品とはいえ、そこにいくらか研究的な方向性が認められるもの、フィクションと研究の中間的な形態を取っている作品を集めた叢書である。「トランスギャルド trans-garde」はフランス語の「アヴァンギャルド avant-garde」(日本語訳としては通常「前衛」という言葉に由来している。「アヴァンギャルド」という語彙を歴史的に見れば、それ自身が属する時代よりも先行しているアートという意味では19世紀後半、マネと印象派の画家たちをめぐって1880年頃に使われ始め、20世紀に入ると未来志向の芸術運動、流派としては1917年のロシア革命と連動して開始されたロシア・アヴァンギャルドの名称として定着する。この間、イタリアでは未来派が登場し、ドイツでも1920年代に表現主義が本格化する。「トランスギャルド叢書」はこうした流れを再検討するプロジェクトとしてある。アヴァンギャルド芸術においては新しさや先駆的であることが絶対的に重要だったのに対して、果てしない新しさの探求によって芸術の流れ、歴史が形作られていると考えること自体が21世紀に入ると疑問視されるようになったからである。「トランスギャルド」という造語は、アヴァンギャルドに含まれるアヴァン、「先頭に位置している、先に進んでいる」を、トランス「横断的に」ずらして考え直すことを意味している。本叢書は、前衛芸術運動の中に実際にはあったものの今日では忘れられてしまったものに注目することによって、アヴァンギャルドの全貌をこれまでよりも総合的に明らかにすることを目指すものになるだろう。

トランスギャルド叢書には、このほかにもいくつかの特徴がある。それは第二に、国家と言語の統一体としてのナショナルなものを再定義することである。作品のテーマが一国にとどまるものではなく、国境を越える活動を展開した芸術家を対象とする、トランスナショナルな性格を有する書物を扱う。第三に、文学作品を中心とするものの、それにはとどまらない芸術ジャンル横断的であることにある。言語表現を経由するが、美術や映画などの視覚イメージ、音楽や音声メディア、ダンスなどの舞台芸術という多様な領域と関わる活動を行った芸術家を取り上げる。そして第四の、最後の特徴として、男性芸術家中心に作り上げられてきた芸術運動の歴史を再考し、女性や性的マイノリティなどを含めたより広いジェンダー的な観点から芸術運動を再規定する。

本書、ダリュセックの『ここにあることの輝き』は、まさに本シリーズを開始するに相応しい作品であることが分るだろう。トランスギャルド叢書は、同時刊行されたフランス、ドイツ（アンナ・ラインスベルク『それぞれの戦い』、西岡あかね訳、東京外国語大学出版会）から始まってロシア、イタリアを經由し、順次ヨーロッパの全域と南北アメリカへと展開していく予定である。

(荒原邦博)

